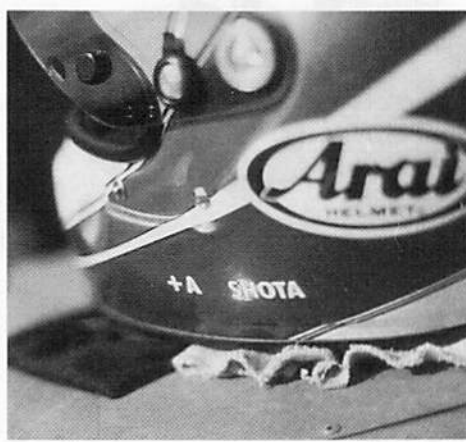


前へ

FJ-1600



DIRECTION SHUHEI NISHIZAKI  
TEXT BY AKIHIRO KOMIYAMA  
PHOTO BY SADAHO NAITOH



**水野昇太選手を応援して下さる  
スポンサーを募集しています。**  
 (お問い合わせ先)  
 フェイム事務局  
 〒604京都市中京区六角通烏丸東入ル  
 大輝六角ビル2F  
 Tel (075) 256-7558 担当/西堀・片田



**LAST LAP GO AHEAD**

1994年2月17日。誰もいないはずの鈴鹿サーキット西コースに、エキゾーストノイズが響き渡っていた。

まだ寒さで緊張した空気を蹴散らすように、コーナーで聞こえてくるソフトダウン、そしてアクセル全開のエンジン音。たった1台なのだが、まるで他のマシンと競っているかのように感じさせるマシンの轟音があたりを揺さぶっている。

しかし、その走りから伝わってくるものは、レース独特の戦間的緊張感ではない。喜びである。

マシンはラップを重ねるごとにスピードを上げていくのだが、その姿は単に速くなるというより、喜びで踊っているように見える。まるで今まで我慢していたものを一気に爆発させているかのよう……。ピットに入ってきた見慣れぬ新しいマシンから降り立ったのは、真新しいレーシングスーツの水野昇太だった。

彼は、今年F3とFJの間に新たに誕生したカテゴリーであるF4のマシンをシェイクダウンしていたのである。

彼は今年、F4に乗る。

昨年目標としていたF3000はもとより、F3のシートを寸前のところで彼は逃していた。岡山T1サーキットの最終戦で優勝できず、惜しくも総合ランキングのトップになれなかったことが影響した。シーズン後半にマシンの調子が上がらず、彼本来のアクレシブな走りができなかったことはいままでもない。だが、勝った者だけが生き残れるという掟のレース界では、そんなことは言い訳にすらならない。

もちろん、トップにはなれなくても彼のドライビングセンスと将来の可能性を認め、契約してもいいという話がF3のチームからなかったわけではない。事実、かなり有名なチームからの誘いもあった。

「確かに、F3のチームからの誘いもありました。「スポンサーさえ見つけてくれれば乗せてやる」って感じのものでしたけれど……。やっぱりできるだけカテゴリーが上の

マシンに乗りたいたから、本音をいうと話が来たときは迷いましたよ。どうしようかなって」

しかし彼はその話を手重に断った。そのチームが求めるスポンサーを確保できなかったこともあるが、彼は自らそのチームのF3シートには乗らない、と決めたのだ。

レーサーは、監督、メカニックらのチームメイトと対等にコミュニケーションがとれるからこそ、ベスト状態のマシンを組み上げられるし、最高のレース展開を生み出すことができる。

「プロならば「乗せてやる」よりも「乗ってくれるか」というチームの方がいい走りができると思うんです。F3に乗れないのは確かに残念だけど、F3の弱いチームに比べて、体制ができていて、何よりもスタッフがいいんですよ。今年走るF4のチームの方がそういう意味ではいいです」

昨年、フリードライバーとして、ほぼすべてを一人でこなしていた彼は、今年様々な面をサポートできるチーム体制をもつ、オートスポーツレーシングチームからF4にエントリーする。

「昨年までのFJは、夢(F1)を見ながらレースをした感じですね。だけど、この1年で夢のことだけ考えられるヤツは、経験や苦労をしてないことがイヤというほどわかったんです。確かにF1ドライバーになるには、一般人も感じているように甘いもんじゃありません。速く走る実力とお金という二つを手にした者だけが得られるものなんです。今年からは夢みるのはやめました。F1という頂点に続く道を踏み外さないように一つ前、一つ前へとしがみついて行こうと決めました。F4が上がったことでFJより確かに一つ前へ出たんだし、夢ではなく現実的に、毎年近づいていくことを今の目標としました。今はF4で勝つことしか考えていません。FJを始めたときのようにがむしゃらに走るのではなく、FJの経験を活かして、一戦一戦現実

に優勝をめざす。今年は一気に大きな夢を見ないで、確実にやりますよ。道は(F1へ)続いているんですから」

この言葉に、この一年での彼の大きな成長を実感した。以前の彼なら、FJのときのように新たなF4というマシンで、誰より、どのくらい速く走れるかということだけを考えたはずだ。

しかし、今彼の意識はそうしたら勝てるかの一点に集中している。

自分が速く走ることだけではなく、それを助けるチーム体制やスポンサーとバランスがとれなければ、勝つことなどできない。言い換えればレーサーとマシン状態に加えて、それを支える体制、これらが三位一体となったときに本当の速さと勝利が得られると、昨年のFJでの苦い体験から得、彼はプロレーサーとしてさらに成長したのだ。

当然のことのようだが、それに気づかずスピードだけを追い求め、挫折したレーサーは多い。A・セナのように派手に頂点を極められるのは、本当にごく一部なのである。F1のトップレーサーたちは、かつてその時々自分の分のおかれた立場を知り、生まれたチャンスを一つ一つクリアしてきたのだ。

メンタル的にも、テクニク、経験においても彼は今年から本当にプロレーサーとしてスタートするのだ。

「こう考えられるようになったのは

は、この一年間で水野昇太を応援してくれる人たちに会えたからなんです。スポンサーだけではなく、応援してくれる人たちが様々な形で助けて下さったからこそ今年もレースができる。だから僕自身を応援してくれる皆さんの人たちの期待に応えたい。それは現実をひとつひとつクリアしていく、少しずつでも夢を実現させていくことなんです。そして実現させるのはた速く走る自分の力だけではなく、こういった応援してくれる人たちの力を借りても多くつくることがわかったんです」

応援してくれる人をつくる。これは夢を目指すプロにとって必要不可欠なものだろう。

水野昇太の夢はまだ現実となっていない。だが、一步一步着実に彼は夢へ近づいている。道のりにまだ困難は多いが、彼は確実に進むはずだ。ひとつでも、前へ」と……。

